

『生活を伝える方言会話:宮城県気仙沼市・名取市方言 資料編』  
『生活を伝える方言会話:宮城県気仙沼市・名取市方言 分析編』

東北大学方言研究センター編  
ひつじ書房 2019年

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

佐野 直子



二〇一一年三月一日の東日本大震災は、東北地方太平洋沿岸部地域に甚大な被害を与えた。人々の生活を根底から揺るがし、コミュニティが崩壊する危機に陥る中で、東北方言を中心に、全国の方言の研究にとり組んできた「東北大学方言研究センター」は、震災後すぐに、「被災地のために支援者向けの方言パンフレットを作成したり、方言スローガンの効用を調査したりと実践的な取り組み（『資料編』「あとがき」五一頁）」を開始していた。そして、「これも被災地支援の一環とした始めたのが方言会話の記録作業であった（同上）」。

二〇一二年にはすでに文化庁の「東日本震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業」に着手し、その後、二〇一三〜二〇一六年度に「被災地における方言の活性化支援事業」として行った調査を、五〇〇頁以上にわたる『資料編』（CD・ROMつき）、三〇〇頁以上にわたる『分析編』の二巻本として刊行されたのが、本書である。二〇一八年度から本学に赴任された椎名渉子先生も、本プロジェクトに参加し、『分析編』に寄稿している。

評者は社会言語学という、父親に生成文法理論、母親に方言学を持って生まれたが、母に反抗し父と大衝突して家を飛び出し、社会学を道づ

れにふらふらしている放蕩息子のよな学問分野を専攻している。評者にとっては「母方のいとこ」である日本の方言学は、現在ここまで来たのか！と、思わず拍手したくなるような成果であった。

本書は、いくつかの非常にユニークな特徴を持っている。まず、上述の通り、東日本震災の被災地である宮城県気仙沼市と名取市をそのフィールドとしている点がある。そこには、未曾有の被害を面前にして、今までフィールドとしてずっとお世話になってきた諸地域に対して、方言学という学問が何をなし得るのか、という、研究者たちの真摯な問いかけがあるように思われる（震災当時、評者は自分の持つスキルが被災地に何一つ役に立たない、という現実が心底歯がゆかったものであった）。そして、被災地の方言を、できるだけ早く記録し、その後の保存・継承に役立てるものとしたい、という使命感、そして、当地の方言を残そうという研究が、被災者たちにとっての励み、癒し、支えになることを祈りつつの研究であったことも伺える。

ただし、社会変動に伴う「方言の消滅の危機感」それ自体は、必ずしも被災地に特異なものではない。「方言学」という学問が、十九世紀以来の社会の近代化に伴う地域の伝統社

会の崩壊と、それぞれの地域の言語的特徴の消滅への危機感によって成立したと言っても過言ではなく、特に第二次世界大戦後においては、その危機感は顕著なものになっていた。それぞれの土地に固有の言語的特徴としての「方言」は、もはや国民教育制度やメディアの発達による「標準語」の普及によって壊滅しつつあり、各地に赴いても、「純粹な方言」を話す話者がほとんどいなくなってしまう、と、現地調査に赴く多くの方言学者が痛感していたのである。しかし、それゆえに本書が採用した手法は、被災地に限らず幅広く適用可能なものであるとも言える。

二番目の特徴としては、まさに本書が採用した手法がある。戦前までの方言学は、特定のインフォーマント（その地域から出たことのない、できる限り年齢が高い人）にさまざまな語彙リストを提示して当地の特徴的な言い方を答えさせ、それを音素や語彙や形態素のような「断片」に分解してから言語地図に掲載していく、といった手法を採用することが多かった。しかし、「方言」とは、そのような断片ではなく、何よりもその地域の生活に根ざした言語行動なのであり、日常において人々が使う話しことば、すなわち「言語生活」であることに、フィールドに出た調査者は気づかずにはいられなかった。

評者は社会言語学という、父親に生成文法理論、母親に方言学を持って生まれたが、母に反抗し父と大衝突して家を飛び出し、社会学を道づ

だとしたら、そのデータ収集のためには、日常生活の言語使用の現場に調査者が居合わせなくてはならない。しかし、「観察者のパラドクス」もあってそれは極めて困難であり、上述のように「方言」が衰退している現在はなおさらである。

そこで、本書では、「自由会話」ではなく、「場面設定会話」を記録することを主眼においた。つまり、「頼む」「勧める」「断る」「尋ねる」など、会話の目的をあらかじめ分類し、全部で一四五個の場面を具体的に設定した後、「各地域の生え抜き高年層の男女各一名ずつ（同上四一頁）」のインフォーマントをお願いして、その場面を自由に「演じて」いただく、という手法を採用したのである。各県史などの巻末に掲載されている「場面設定会話」資料は評者も見ることがあるが、ここまで徹底したものは初めて見た。ちなみに、本書『資料編』においては、「自由会話」も「付録」として最後につけられているが、それは、震災直後の二〇一二年に語っていただいた「震災のときのこと」である（同上四七七〜四八五頁、四九五〜五〇〇頁）。

孫は徒競走に出ました。最初、スタートで出遅れたのですが、最後は猛然と追い上げていきます。AとBはさかんに声援を送ります。その甲斐あってか、孫は三人抜いて見事一等でゴールインしました。AとBは歓声をあげます。そして、お互いに喜び合います。そうした一連のやりとりを上演してみてください。（同上二〇〇〜二二一頁）「三一九 福引の当たりに出会う AとBは近所の知り合いです。町内会の福引を引きましたところ、最初にクジを引いたAの景品はポケットティッシュでしたが、次にクジを引いたBはなんと温泉旅行を引き当てました。その温泉はAがずっと行きたいと思っていたところでした。そのときのやりとりを上演してみてください（同上三四頁）」と、非常に具体的に、それだけで当地の現時点での（高年層の人々の）生活が想像できるものがある（町内会や婦人会が現在も重要な地域のつながりを担っていることがうかがえる）。

そして、一部の場面については、着座してその場面を想像しながら会話してもらうだけではなく、実際にその場面を小道具などを使って設営したり（擬似的環境）、設定場面の場所まで行ってもらったりして（現実的環境）インフォーマントさんに行動してもらった形をとった（複数の

方法で複数回収録した場面もある）。例えば場面一〜三八においては、調査員数名が走る演技をして、それを見ながら会話してもらい、場面三〜九では抽選機の模型を用意して、実際に回してもらったのだそうである（同上四三頁）。場面の写真もいくつか掲載されているが、その調査風景は実に楽しそうだ。データは表音式カタカナで書き起こされ、その共通語訳が下に漢字かなまじりで表記されて『資料編』に収録されているが、CD・ROMに付された音声データが圧倒的に楽しい。映像も一部動画で記録されており、東北大学方言研究センターのウェブサイト（<https://www.sinsaihougen.jp/>）には、音声データと一部の動画も公開されている。なかなかの臨場感である。

この手法は、インフォーマントの「演技力が会話の出来不出来に大きく関わる（同上四頁）」ことになり、「会話の自然性の確保（同上五一頁）」という課題があるが、「観察者のパラドクス」に対してここまでふっきた対応が取れるのであれば、そのことを組み込んだ分析をすればいい。この手法をあちこちの地域で採用すれば、各地域のインフォーマントがどれだけノリノリで演じてくれるか、記録前の打ち合わせの様子などの地域差も出そうで、それ自体

が研究対象になりそうである。そして分冊の『分析編』も特徴的である。音韻・音調で二編、文法で六編、語彙で二編、言語行動・談話で五編、方法で二編、合計十七名の研究者が、多様な方面からの資料の分析を行なっている。特に本書において重要なのが「言語行動・談話」の研究であり、それは、「この会話資料が場面設定会話の方式をとっていることの強みを生かしたものである（『分析編』iii頁）」。

「会話の自然性」にこだわるあまりに、行動としての言語、生活としての言語の記録を取ることが困難なら、「方言」へのまなざしはいつまでもたっても断片的なものにならざるを得ないだろう。それならば、それがたとえほんの一部分であり、ある程度加工されたものだとしても、できるかぎり、総体としての言語行動——アガンベンの言う「語るという事実 (factum loquendi)」(アガンベン「二〇〇〇」)「人権の彼方に」(以文社、七〇頁)——を、資料として把握し、それを今度は「地域の言語生活」として総合的に分析しなくしては、方言研究とは言えない、という矜持が感じられる。本書の『分析編』で提示された研究のまなざしは多様であり、共同研究の強みを実感できる。収録方法が着座式と行動式ではどのように異なるか、など、今

回の資料収集の方法論についての研究もあり、着座式と行動式では談話的特徴に明らかに違いがあることも確認されている。音韻・音調・文法・語彙といった、「従来」の研究分野であっても、会話資料を利用してそのデータが提示されているため、初学者にも非常にわかりやすく、教育的にも有効であると思われる。

「言語行動・談話」研究は、本プロジェクトの『資料編』の名取市と気仙沼市の比較（中西太郎）のみならず、資料収集方法の比較（小林隆）、関西地方も含めた全国調査との比較（澤村美幸）、高年層と若年層の会話の進め方の比較（太田有紀）、と、比較研究が多いが、そうなるとデータサンプル数の少なさ（代表性の低さ）が少々気になった。その中で、「非難の言語行動の特徴——要素とその出現傾向の場面差に着目して——」（椎名渉子）は、言語行動の地理的特徴というよりも、豊富な場面設定会話という言語資料の特徴を活かし、「非難」という言語ストラテジーの記述に挑戦している談話研究（確かに「非難」という言語行動を言語資料としてデータ化するなどという機会はなかなかない）という意味で、方言学研究においても出色であるだろう。「場面設定会話」という資料収集の可能性の広がりを感じられて非常に興味深い。

最後に、筆者プロフィールに出身地が書いてあるのも本書の特徴であろう。言語研究・フィールド研究において、研究者・観察者が透明なはずはない。特に談話レベルでの特徴を記述しようとする、観察者側の直感に頼ることも多いという（同上、二〇四頁）。だとしたら、研究する側がどのような言語的背景を持つているかによって分析のあり方も異なることを、むしろ徹底して提示してしまおう、ということなのだろう。椎名渉子さんはこの研究グループの中で数少ない東京出身者であり、顛倒した抑圧を受けている東京弁話者（バカヤロウ、コッチャーキョーツーゴナンテハナセネンダヨ！）として頼もしく感じた（椎名さんとは社会方言が違いそうではあるが……）。

本書は、宮城県のとった二つの自治体において、インフォーマントは各二名、そして（数は多いとはいえず）絞り込んだ場面設定会話を演じてもらう、という、非常に限定されたものである。本書を読むと、放蕩息子な社会言語学側としては、「生え抜きの高年層」だけでなく若年層・中年層・高年層と若年層、「よそ者」と地元の人、親疎関係、社会階層など、インフォーマントの選定や設定でデータはかなり変わるだろうし、

多数のインフォーマントのデータを取ることでは話者の個体差ではなく地域ごとの傾向がより明らかになるのだろうし、場面設定はいくらでも思いつくが、三人以上の会話の場合にはまた状況が変わるだろうし、場面転換のコードスイッチングも重要であるだろうし、記録場面において目の前にいるのが調査者としての研究者集団だけなのか地元の人も見ているのかでもだいぶ変わりそうだし、時代によってももちろん言語的特徴のみならず場面設定の中身も変わるだろうし、と、いろいろと思いついてしま

う。しかし本書は、これだけ限定された条件に絞り込んでなお、データは大量で、その収集と整理に費やしたエネルギーが膨大であること、その資料に対してこれだけ多様な分析が行えるが、それでもまだ資料のほんの一部しか活用されていないこと、そしてたとえ現在あるデータを徹底して分析したとしても、「言語生活」のほんの一部が姿を現わすにすぎないであろうことを、はっきりと自覚している。

そして、評者が一読するだけでこれだけいろいろ思いつくということでは、本書プロジェクトに携わった方々はもちろん（上記の思いつきなど皆さん重々承知であろう）、ほかの多くの方言学者や言語研究者がやるべきことはまだいくらかもあるし、

その研究には終わりが無いということだ。「方言」のみならず、「ことば」そのものの豊饒さ、その研究の広がり可能性に、評者まで励まされた気分になった。来年度からはこの調査を東京・大阪・九州で実施する予定だそう、今後のシリーズ化にも期待したい。